

鳥居龍蔵と本山彦一の交流

著者	石井 伸夫
雑誌名	なにわ大阪と本山彦一：大正期大阪への貢献と本山考古室：研究成果報告書
ページ	139-156
発行年	2020-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020258

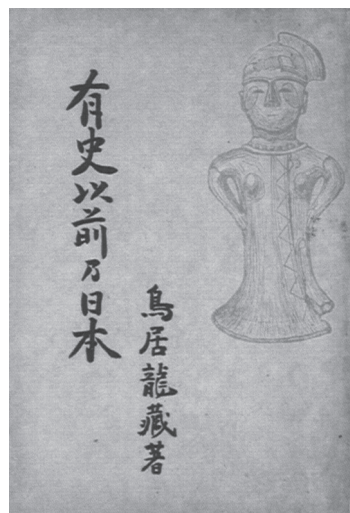
鳥居龍蔵と本山彦一の交流

石井 伸夫

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館学芸課課長補佐(学芸員)

はじめに

1918(大正7)年、鳥居龍蔵の主著となる『有史以前乃日本』が刊行された。鳥居独自の日本人起源論をまとめた書物はたちまち大きな話題となり、当時の学界のみならず一般社会にも広く知られることとなる。同書は、初版の刊行後すぐに版を重ね、二年後の1920年には早くも第9版を発行、その後、1925(大正14)年に刊行された増補改訂版も、1927年までに4版を発行するなど、新旧併せて10年間で13版を数える大正期の一大ベストセラーとなった。当館に所蔵された初版本の表紙をめくると、序文に先立って記された「本山彦一大人に、謹んで此の拙き一書を捧ぐ」の一文が目飛び込んでくる。鳥居から本山への謝辞である。「鳥居は本山に対して、何を謝したのか?」。本稿では、この謝辞を考察のスタート地点とし、当館所蔵の資料をもとに、鳥居龍蔵・本山彦一両人の交流を時系列に辿ることにより、その現代的意義を問い直すことにしたい。



第1図 『有史以前之日本』初版本

一 出会い

鳥居と本山との交流は1914(大正3)年に始まる。本山の伝記である『松陰本山彦一翁』に記された本山本人の述懐を引用してみよう。

大正三年頃、汽車中で鳥居博士に邂逅し、偶々博士が朝鮮において調査しつつあると聞き、研究費を出して、新聞原稿を依頼したことがある。

とあるのがそれである。その後、1917(大正6)年には、本山の求めに応じ、鳥居による近畿調査が行われ、交流は本格化する。鳥居はこのときの調査成果をもとに、本山の地元である大阪府堺市の濱寺において、「有史以前の日本」と題する講演を行い、これが、鳥居の代表的著作である『有史以前乃日本』刊行のきっかけとなっていった。

二 近畿調査の概要

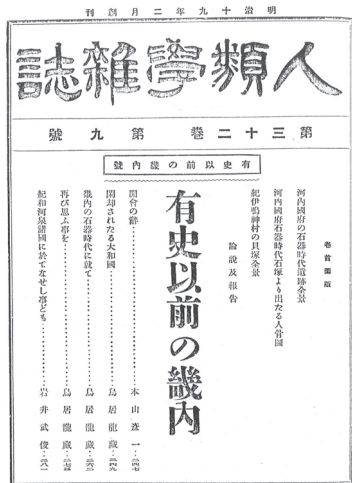
先述のように、1917(大正6)年の7月下旬から8月にかけて、鳥居龍蔵は本山彦一を伴い、近畿各地で考古学的な調査を行った。その契機について、鳥居が晩年に記した自伝『ある老学徒の

手記』には、次のような一文が見られる。

畿内に石器時代遺跡ありや否やは、大正の初め頃には一大問題となっていた。当時、大阪毎日新聞社長本山彦一氏は「坪井正五郎博士に乞うて、毎日新聞に畿内の石器時代の原稿を求めたところ、これに対し、畿内には殆ど同時代の存在なしと同新聞に記載された」と申され、畿内には果たして石器時代の遺跡は存在するや否やについて、本山氏は大いに疑問をいだいておられたが、大いに決心するところがあり、この結果、大正六年の春、私に一書を送られた。

鳥居宅に届けられた本山の書簡には、「畿内石器時代の遺跡の有無を実際に探査し、これを確定するために当地まで出張してもらいたい」との旨が縷々記されていた。早速鳥居は同意の旨を返書

にしたため、大学の夏期休暇を待って7月18日に東京を出発し、本山の待つ大阪に到着したのであった。近畿調査の第一報をなす7月21日付け『大阪毎日新聞』には、「同行相共に調査研究をなすべく、地方史蹟闡明の一端に資さんとす」との本山の決意が掲載された。「畿内に石器時代遺跡ありや否や」。積年の疑問の答えを求めての調査であった。この調査の具体的な行程については、1917（大正6）年7月刊行の『人類学雑誌』第32巻7号の「雑報」欄に概要が記されている。また2ヶ月後に刊行された同誌第32巻9号は「有史以前の畿内」特集を組み、そのうちの岩井武俊論文「紀和河泉諸国に於いてなせし事ども」が調査行程記録の役を担っている。この二つの資料を突き合わせることによって、行程の概要を把握することができるが、細部については、不明点や矛盾点もみられる。



第2図 『人類学雑誌』第三十二巻第九号

当館には、近畿調査の行程について、従来不明であった部分を補足すると思われる資料が2点所蔵されている。一つは、「大和石器時代遺蹟調査」と題された一枚物の資料で、1917（大正6）年7月26日～31日までの調査地が書き上げられている。鳥居の筆跡とは異なる筆致で端正にまとめられており、調査終了後の早い時期に、備忘の目的で別人によって記されたものと思われる。以下に、翻刻を掲げる。

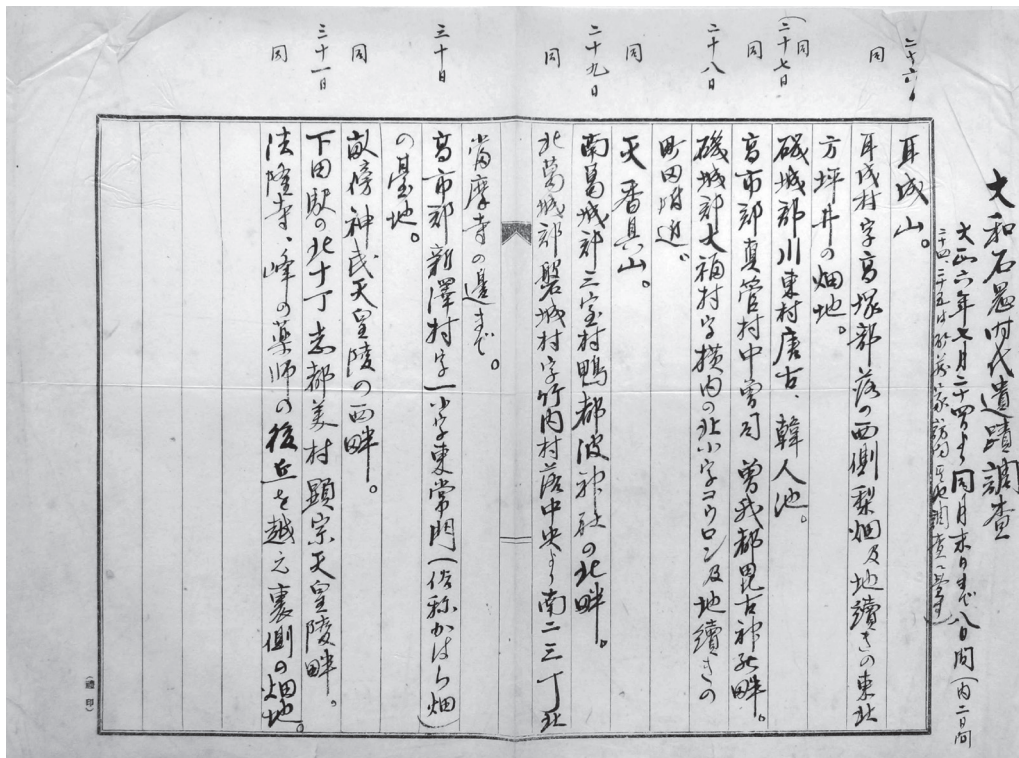
【翻刻】 大和石器時代遺蹟調査

大正六年七月二十四日より同月末日まで八日間（内二日間
二十四、二十五日は■蔵家訪問其他調査に費やす）

二十六日 耳成山

同 耳成村字高塚部落の西側梨畑及地続きの東北方坪井の畑地

- 二十七日 磯城郡川東村唐古、韓人池。
同 高市郡眞管村中曾司曾我都毘古神社北畔
- 二十八日 磯城郡大福村字横内北小字コウロン及地続きの町田付近
- 二十九日 南葛城郡三室村鴨都波神社の北畔
同 北葛城郡磐城村字竹内村落中央より南二三丁北當麻寺の邊まで。
- 三十日 高市郡新澤村字一小字東常門（俗称かはら畑）の臺地
- 三十一日 下田駅の北十丁志都美村顕宗天皇陵畔
同 法隆寺、峰の薬師の後丘を越え裏側の畑地



第3図 「大和石器時代遺蹟調査」

いま一つが、罫紙8枚からなる鳥居直筆のメモである。各紙とも左肩に(3)～(10)のナンバリングが有り、もとは10枚以上のメモであったと思われる。そのうちの(3)～(5)に、8月1日から、調査を終えて8月23日に東京に帰るまでの調査地が記されており、鳥居の直筆であること、走り書き的な筆致であることなどから、調査と併行して記されたものと思われる。また(6)以降の各葉は、調査記録の様相を呈している。各種の石器の略図や「弥生式土器」に関する記載があり、この調査が畿内の石器時代の存在を問うものであったことがわかる。行程記載部分の翻刻は、以下のとおりである。

【翻刻】 (3)

八月一日 濱寺講演
閉却せられた大和
八月二日 休養 整理
八月三日 和歌山市
清水平左衛門氏
石亭
八月四日 海草郡鳴神村付近
発掘
八月五日 再び同所付近
八月六日 岩井、田沢氏は 河内に行く
八尾に行く
私と本山氏は歴史地理的
神部の
記及と標本■■見る
福原氏
黒板氏にと■■す
私は去晩道明寺につく

(4)

八月七日 駒ヶ谷 (竹内峠下)
山田村 (蘇我倉山田石川磨石棺)
上の太子—喜志、新堂—道明寺
八月八日 柏原下車 恩智
新に発見せし川
在付近
八月九日 国府
八月十日 同
八月十一日 国府 人骨
本山氏と岩井氏は再び恩地
八月十二日 国府 人骨
一体は喜志村に向う
八月十三日 国府出發 濱寺更に
泉州貝塚、信太 葛葉神社高師の濱

(5)

山城は 不■■行する事あれと一寸
宇治、木津、淀川筋の予察をして
大阪の舟、ナマヅエの舟

八月二十三日 帰京す

日程に二十四日間費せり

表面採集 (遺物散処地) 30余

発掘 (遺物包含地) 16

和泉 四ツ池 2

大和 韓人池 2

同 新澤 2

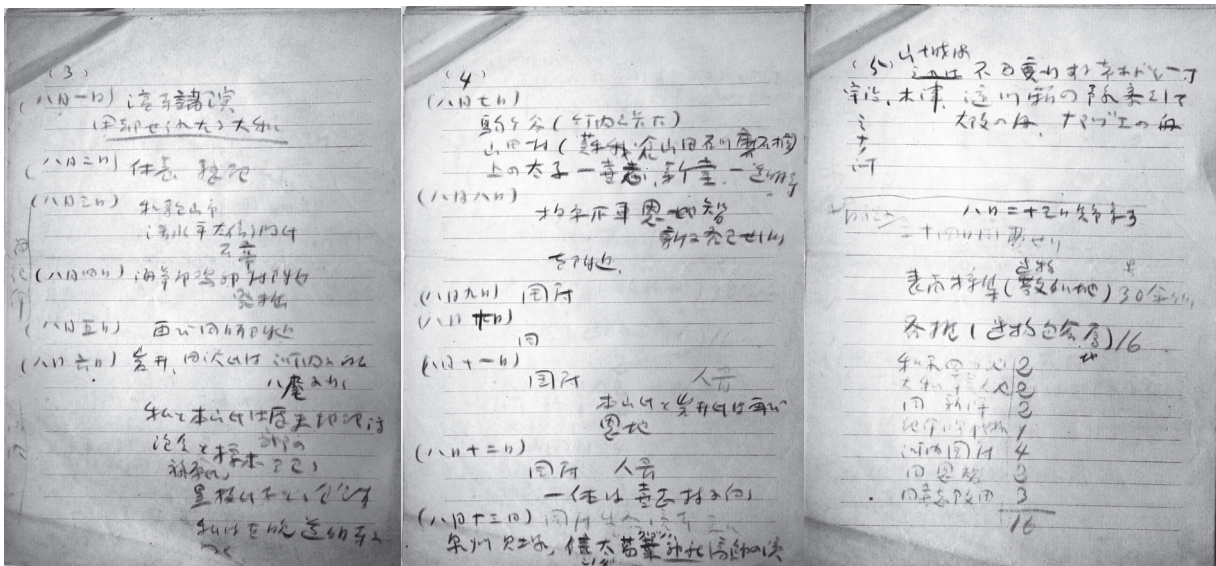
紀伊 鳴神村 1

河内 国府 4

同 恩地 2

同 喜志阪田 3

16



第4図 近畿調査の行程を示す鳥居直筆のメモ

以上の諸資料から、1917 (大正6) 年夏の鳥居と本山の足跡をたどれば、7月23日、大阪の濱寺を出発し、まず大和の遺跡を廻ったこと、7月31日にいったん濱寺に帰り、翌8月1日に大和地方調査の成果についての講演を行ったこと。休養の後、8月3日から、紀伊、和泉、河内の調査を行い、8月23日に帰京したことが分かる。また、この間に鳥居達が調査した主な遺跡を列挙するならば、四ツ池遺跡 (和泉)、唐古遺跡 (大和)、竹内遺跡 (大和)、鳴神貝塚 (紀伊)、恩地遺跡 (河内)、



第5図 四ツ池遺跡全景



第6図 鳴神村 総垣内貝塚全景



第7図 鳴神村総垣内貝塚調査中の本山



第8図 鳴神村総垣内貝塚発掘調査



第9図 南高安村 茶の木遺跡発掘調査



第10図 東坂田遺跡発掘調査



第11図 国府遺跡発掘調査



第12図 国府遺跡集合写真

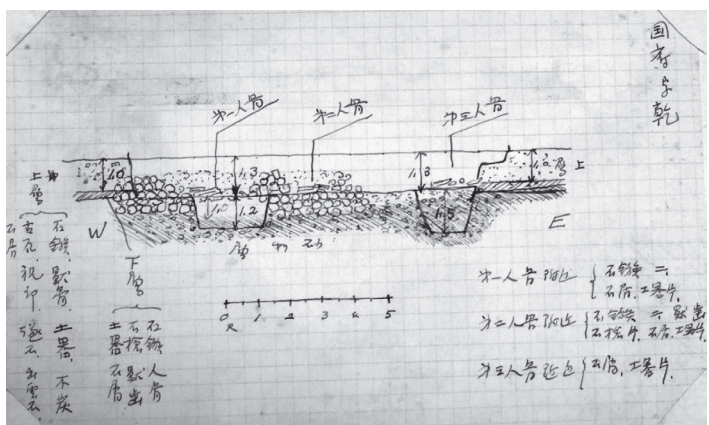
国府遺跡（河内）などがある。いずれも、後年にわたって発掘調査が継続され、学史上に名を留めることになる重要遺跡である。鳥居と本山の調査は、近畿地方における遺跡調査の嚆矢となったのである。ここでは、当館所蔵写真のなかから、本山の活動状況をとらえたものを中心に掲げておきたい。なお、写真各葉の調査地点及び作業内容等については、写真の添付された台紙裏面に記載されたメモにもとづく。

三 近畿調査の意義

1917（大正6）年盛夏に行われた、鳥居龍蔵と本山彦一による近畿調査は、前節の冒頭でも述べたとおり、「畿内に石器時代遺跡ありや否や」という本山の問いかけに端を発する。当時の学界では、石器時代の日本列島には、縄文土器を使用するアイヌが先に居住しており、その後、金属器を使用する日本人の祖先が渡来し、アイヌを駆逐しながら定住していったとする考え方が一般的であった。また、所謂「弥生式土器」についても諸説があり、評価は一定していなかった。したがって、渡来した日本人の拠点となった近畿地方には、石器時代の文化はほとんど存在しないと考えていたのである。鳥居は本山の求めに応じ、本山の住む大阪の濱寺を振り出しに、大和、紀伊、和泉、河内を巡り、各地で考古学的な調査を実施した。それは、旧来の常識を再



第13図 国府遺跡調査風景 中央が本山、右端が鳥居



第14図 国府遺跡土層断面図

検証しようとする課題意識をもった調査行であった。

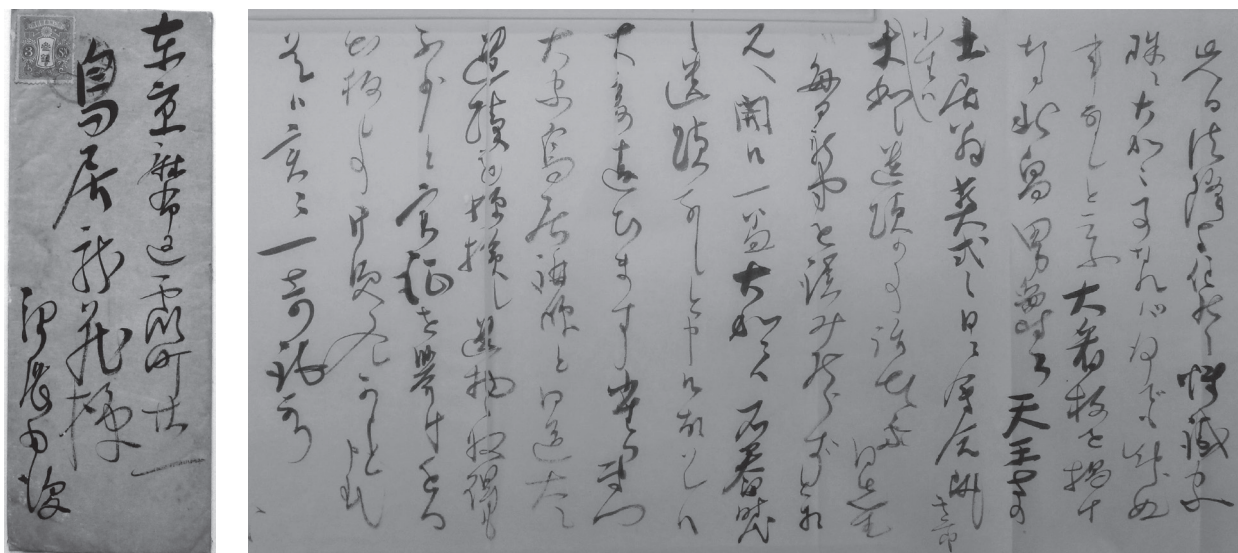
近畿各地で現地調査を行う彼らの前に現れたのは、大量の「弥生式土器」と、それに伴う石器類であった。鳥居は、曖昧な位置づけであった「弥生式土器」の使用者を、大陸から朝鮮半島経由で日本列島に移動し、日本人の主要構成要素となった「固有日本人」と考えた。日本人の祖先は、石器時代から日本列島に定着していたという新説を提唱したのである。

さらに、鳴神貝塚、国府遺跡などいくつかの遺跡からは、当時、「アイヌ派土器」と称されていた縄文土器が出土し、これらが「弥生式土器」と共伴して検出されるケースも確認された⁽⁴⁾。鳥居は、「固有日本人」と先住民族は、単純な人種・民族の置き換え（先住民族を新来民族が駆逐する）ではなく、衝突、対立とともに、共生、混住と混血を繰り返しながら、次第に日本人の祖型になっていったことを、この調査で確信した。大正6年の近畿調査は、鳥居の代表的学説である「固有日本人」論の形成に、直接かつ多大な影響を与える調査となった。

四 近畿調査余録

1917（大正6）年8月22日、鳥居龍蔵は近畿調査の全日程を終了し、翌23日に、東京への帰途についた。自身の学説を補強する大きな成果をあげた鳥居は、調査成果の取りまとめにかかる。この頃の鳥居の動向と、本山彦一との交流を示す資料が、当館に所蔵されている。9月25日付け本山彦一書簡、及び9月29日付け本山彦一書簡の2通がそれであり、宛先はともに「鳥居龍蔵」である。ここでは、その主要な部分の翻刻を掲げるとともに、書簡の内容を手がかりに、近畿調査直後の鳥居と本山の動きを探ってみたい。

9月25日付 本山彦一書簡



第15図 9月25日付 本山彦一書簡

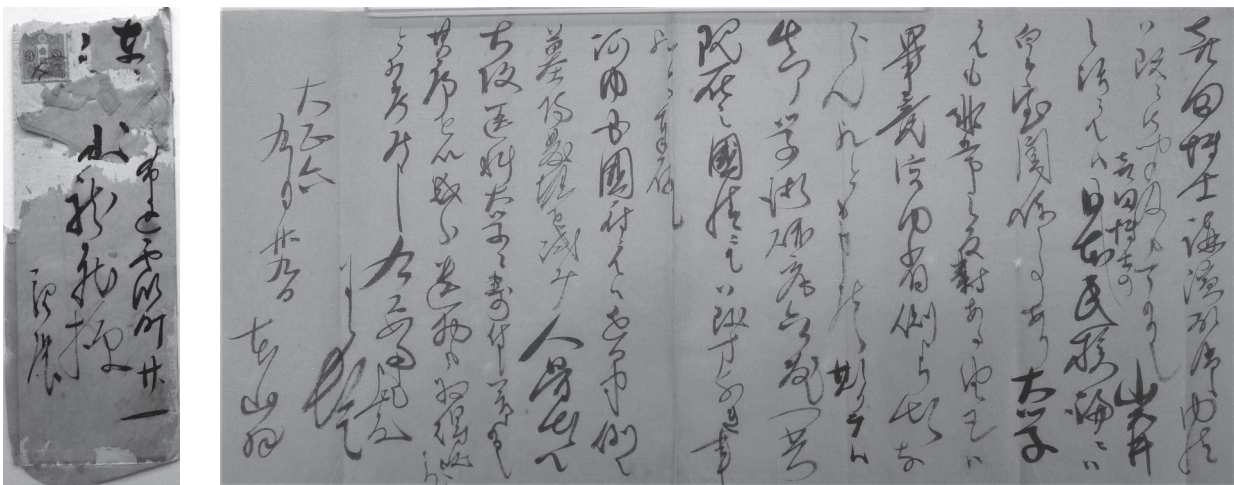
【翻刻】 (前略)

先日、法隆寺住居之博識家
 殊ニ大和之事なれば何でも知らぬ
 事なしと云ふ、大看板を掲げ
 たる北畠男爵ニ、天王寺の
 土居翁葬式之日ニ会合致し、其節
 小生ハ大和之遺蹟の事話出候処、同先生
 ハ毎日新聞を読み居らずと相
 見へ、開口一番、大和ニハ石器時代
 之遺蹟はし、と申候故、是ハ
 大変違ひます、小生ハ専門
 大学鳥居講師と同道、大ニ
 遺蹟を探検し、遺物之取得も
 不少と実証を挙げ、近日
 出版候事、御覧ニ入レ可申と申至り候、
 是ハ実ニ奇談なり、

(後略)

奈良県の郷土史家北畠治房氏の「大和には石器時代はなし」との発言に接した本山が、この夏、鳥居とともに畿内の遺跡を探検し、遺物を收拾することで石器時代の存在を実証した事実を伝えたこと、また後段では、京都帝国大学で行われた喜田貞吉の石器時代に関する講演に対する感想などが綴られている。

9月29日付 本山彦一書簡



第16図 9月29日付 本山彦一書簡

【翻刻】 (前略)

喜田博士講演解消之内情
ハ、既ニ御聞及も可有之候、岩井
之話にてハ、喜田博士の日本民族論ニハ
皇国関係之事あり、大学
にても非常之反対ある由、是ハ
畢竟宮内省側より出候な
らん歟とも申居候、斯クテハ
真ノ學術研究六ヶ敷候へ共、
現在之国情にてハ致方なき事
歟と奉存候
河内国国府にてハ、近日中側之
墓場発掘を試み、人骨出候て、
大阪医科大学ニ寄付之筈ニ有之候、
其序を以、幾分遺物も取得致度
と相考居申、右要用迄申上度
早々頓首

大正六

九月二十九日 本山拝

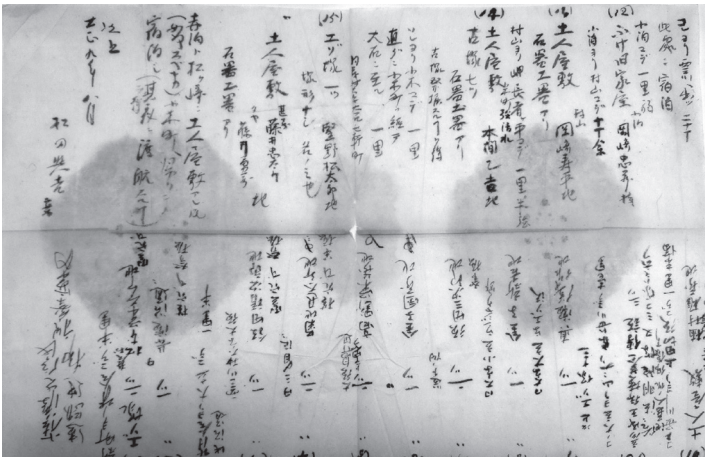
前段は、東北地方の調査を企画していた本山が、実母の病気によりこれを断念したこと、調査研究費について、鳥居への支援が可能であることを伝えるなど、個人的な交流が記されている。その一方で後段は、先の書簡でもふれた喜田貞吉の講演内容について、岩井武俊からの話として、「喜田博士の日本民族論には、皇国の成り立ちに関する側面が有り、大学内部にも強く反対するものがある」との情報や、河内国府遺跡において発掘調査が実施され、人骨が出土したことから大阪医科大学に寄付したことなど、日本人の起源に関する記事が綴られている。

二通とも、直前に行われた近畿調査の余韻がさめやらぬなか、鳥居に学界の動きを伝えようとするものであり、さらなる探求を続けようとする本山の意志を示す内容となっている。

四 佐渡調査

1920（大正9）年8月16日、鳥居龍蔵は、新潟で本山彦一らと落ち合い、翌17日に新潟を出発し佐渡へ渡った。この調査は、「本山社長は既に先年も渡海調査せられましたので、今度の佐渡行きは全く私のためにせられましたという有様で、私は宛然御客様の位置となりました」と鳥居自身が述懐するように、先行して現地調査を行った経験を持つ本山が、学界の権威である鳥居を接遇する趣旨で実施したものであった。

上陸した両津では、地元の歴史地理家・好事家・文学者らが多数出迎え、これまでに採集した遺



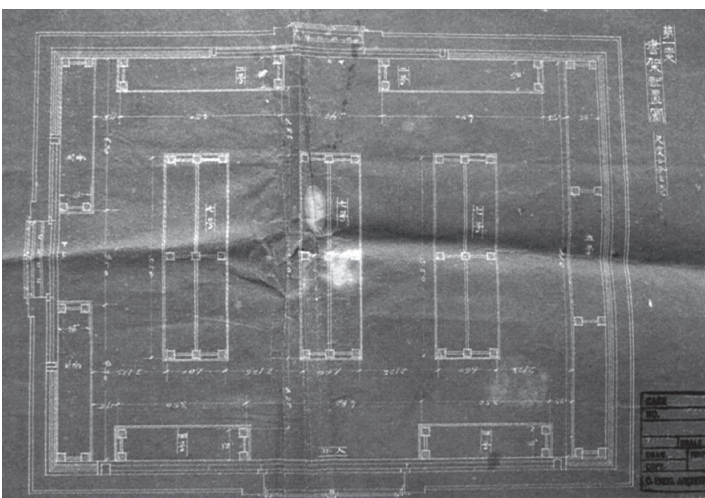
第17図 松田與吉作「小佐渡先住民遺跡遺物視察案内」

物等を鳥居に見せコメントを求めた。左の資料は、地元の歴史家である松田與吉が本山とも相談しながら、鳥居の視察に合わせて作製した、佐渡の遺跡・遺物に関する案内用の資料である。このように、本山の「前さばき」と、これに呼応した地元研究者の熱意によって調査は進められていった佐渡での調査成果を、鳥居はどのように捉えたのであろうか。1925（大正14）年刊行の「有史以前の跡を尋ねて」に記された佐渡調査に関するコメントを引用してみよう。

佐渡に弥生式土器のあることは、本山社長がいわれました如く、もはや確かであって、（中略）佐渡に有史以前からこれを制作した民族のあったことは明らかであります。（中略）吾人祖先は有史以前からすでに佐渡が島に移住して居ったが、アイヌ人はそれよりも更に古く此処に移住しておりました。

とある。先住民族としてのアイヌの存在を認めるとともに、そこに石器時代のうちに移動し定住していった固有日本人の存在を確認するなど、近畿調査と共通する成果を得たことが知られる。本山が設定した佐渡での調査は、鳥居の「固有日本人」論を補強する、新たな根拠となっていったのである。

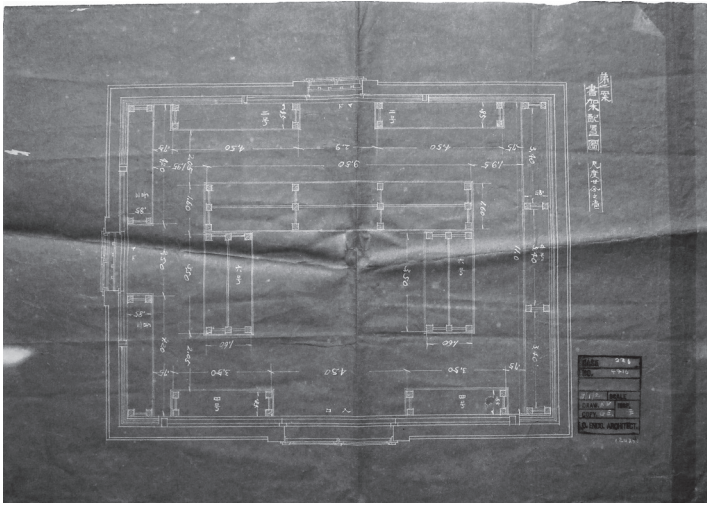
五 萬年永宝



第18図 第一案書架配置図

二枚の「青焼き」の設計図面が当館に遺されている。ともに書庫の設計図面で、一枚は壁面の書架に加えて、中央に六台の書架を三列平行に配したもの、もう一枚は、中央の書架を鍵の手状に配したものである。

この図は、1921（大正10）年に、本山彦一が鳥居龍蔵の為に東京麻布の鳥居宅敷地に建設した書庫の設計図である。二つの書架配置案のうち、どちらが採用されたかは定かでないが、当時、東京でも珍しかった鉄筋コンクリート製の書庫

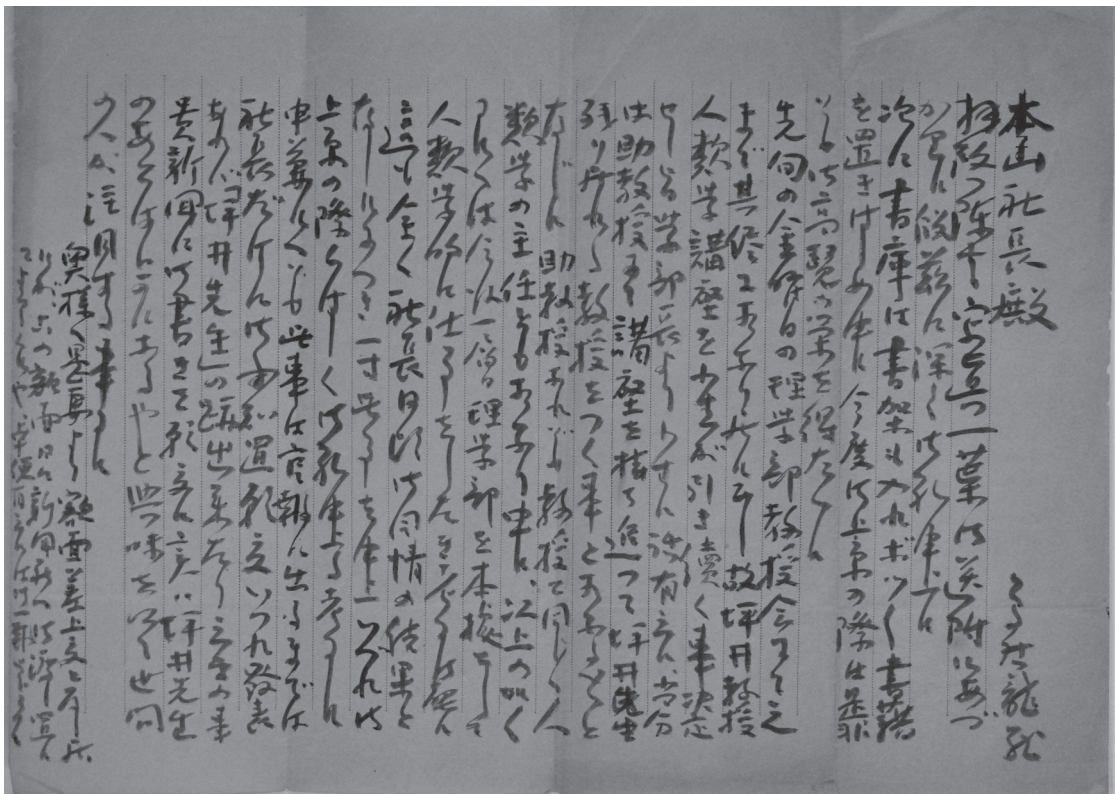


第19図 第二案書架配置図

が、本山から鳥居に贈られたのである。書庫の入口には、設計を担当した遠藤工学士が記念に寄贈した「万年永宝」と刻まれた額が掲げられた。

徳島県立博物館には、書庫「万年永宝」をめぐり、鳥居から本山に宛てて出された書簡が保管されている。そこには、寄贈された書庫に書架を配置し、徐々に書籍を置き始めたこと、直近の教授会で、故坪井正五郎の後を受け人類学講座を引き継ぐこと、そのため助教授に栄進し人類学教室の主任となる見通しとなったことなど、プライベートな音信が綴られている。

また、この情報を当面オフレコにしてもらいたいこと、一方で、発表の暁には、是非ともセンセーショナルに報道してもらいたい旨が記されており、個人的に深い信頼関係を築いていたことがうかがえる内容となっている。以下に、書簡の写真と翻刻を掲載する。



第20図 本山彦一宛 鳥居龍蔵書簡

【翻刻】 本山社長殿 鳥居龍蔵

拜啓 陳者写真一葉御送付にあづ
 かり候段、茲に深く御礼申上候、
 次に書庫は書架も入れ、ボツボツ書籍
 を置はしめ申候、今度御上京の際は、是非
 とも御高覧の栄を得たく候、
 先旬の金曜日の理学部教授会にて、之
 まで其俣に相なり居候ひし、故坪井教授
 人類学講座を、小生が引き続く事決定
 せし旨、学部長より小生に話有之候、当分
 は助教授にて講座を持ち追つて坪井先生
 残り居れる教授をつく事と相なることと
 存じ候、助教授なれども、教授と同じく人
 類学の主任とも相なり申候、以上の如く
 に候へは、今後一層理学部を本拠として
 人類学的に仕事をしたき考えに御座候、
 這も全く社長日頃御同情の結果と
 存し候につき、一寸此事を申上、いずれ御
 上京の際、くはしく御礼申上る考に候、
 申兼候へども、此事は官報に出るまでは
 社長だけに御承知置願度、いつれ発表
 あれば、「坪井先生」の跡出来たり之由の事
 貴新聞に御書きを願度候、実ハと坪井先生
 あとは君なるや、と興味を以て、世間
 の人が注目する事に候、
 奥様へ 愚妻より額面を差上度と存し居
 候が、この額面日々新聞社へ御渡し置候
 てよろしく候や、幸便有之候は御一報被下度候

その後、鳥居はハーバード・燕京研究所の客座教授に就任し、1939（昭和14）年から1951年までの13年間、家族とともに中国で生活を送る。戦後、帰国した鳥居家族を待っていたものは、革命的に変貌した日本社会と、戦災で焼失した居宅跡地であった。ただ、幸いにも本山が贈ったコンクリート製の書庫は、「万年永宝」の名のとおり戦禍を耐え抜き、鳥居は貴重な蔵書との再会を果たした。本山が鳥居に対して行った支援は、文字通り、物心両面にわたるものであった。

六 大洲調査

1928（昭和3）年11月下旬、中国山東省の調査から帰国した鳥居龍蔵は、時を置かず、四国・伊予の大洲において巨石構造物についての調査を行った。鳥居は、これらの構造物をドルメンまたはメンヒルであるとコメントし、地元紙等で時大きく報道された。この間の経緯について、翌春に刊行された『伊予史談』56号掲載の郷土史家・西園寺源透が記した論文には、次のような一節がある。



第21図 大洲巨石調査風景 中央は鳥居、その左は次女緑子

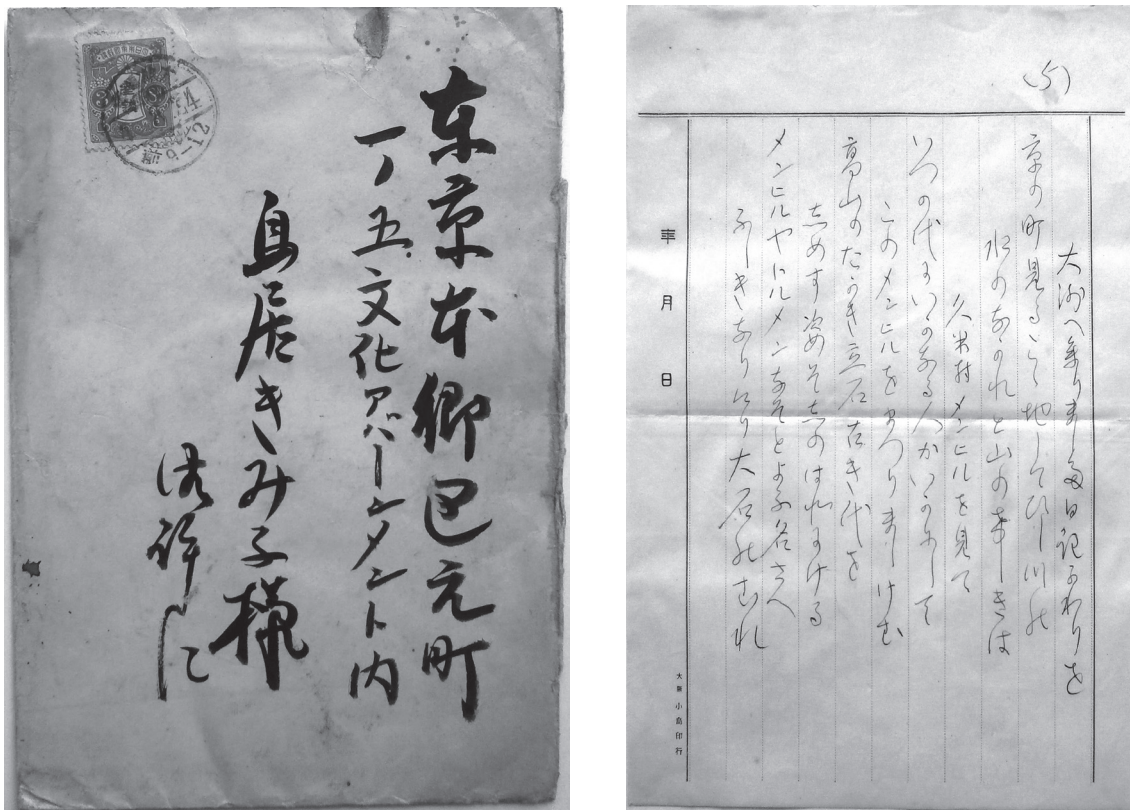
昨年の夏、樋口清之、横田伝松、城戸通徳、門田比古之の五氏は相前後して、富士（とみす）山、神南山、高山、紅葉山において巨石群を発見し、11月下旬には、考古学の権威文学博士鳥居龍蔵氏の視察あり、又多数の石群を発見せられて、学界の大問題となり、(以下略)



第22図 本山彦一大洲訪問時の記念写真 高山のメンヒル前で

後年、地元新聞（海南新聞）の記事をもとに、鳥居の大洲調査を復元した兵頭義高の「鳥居博士と大洲」によると、鳥居は11月24日から29日までの6日間大洲で現地を踏査したとされる。大洲盆地の周辺山麓部で数多くの巨石構造物を確認し、その構造的な特徴や、歴史的な意義についてコメントしており、新聞記事からは随行した郷土史家達の高揚感が感じられる。

鳥居の大洲踏査から日も浅い1929（昭和4）年4月初頭に、本山彦一は、妻の幸を伴って大洲における鳥居の調査地点を訪ねている。上の写真は、久米村（現在の太宰市）字高山に所在する「メンヒル」前で大洲視察の協力者と撮影したものである。中央にステッキをついた本山、その左に幸の姿が見える。高山の立石は、鳥居をして「東洋一のメンヒル」と言わしめたもので、現在太宰市の指定史跡となっている。



第23図 鳥井きみ子宛 本山幸書簡

左上の写真は、本山幸から、鳥居の妻であるきみ子に宛てられた書簡の封筒である。中には10枚の便箋が封入されていた。書簡の内容は、まず型どおりの時候のあいさつに始まり、日々の音信へと続くが、それ以降の大半は、鳥居に紹介されて訪れた大洲の記事で埋められている。なかでも秀逸なのは、5枚目（写真右上）以降にちりばめられた「巨石構造物を詠み込んだ短歌」である。その一節を紹介しておこう。

いつの代に いかなる人か いかにして
このメンヒルを まつりましけむ

高山の 高き立石 古き代を
しめす姿そ しのはれにける

メンヒルやトルメンなぞとよぶ名さへ
ふしきなりけり大石のこれ

屹立するドルメン、メンヒルなどの巨石を見て感嘆する高齢の夫を見ながら、妻の心も高揚しているのだ。鳥居と本山との交流が、調査経費の援助や調査協力といった、資金面、作業面におけるドライな関係にとどまらず、家族をも巻き込んだ、親和的なものに変化していったことを示唆する貴重な資料である。

七 本山没後

1932（昭和7）年12月、本山は、享年80歳でこの世を去った。蒐集した考古資料の目録が末永雅雄によって、没後早期に刊行されたこと、また資料自体も、戦後、末永が所属する関西大学に移管されたことは周知のとおりである。本山の死から20年が過ぎようとする1951年、13年間



第24図 鳥居の建設大臣官邸への入居を伝える新聞記事

在籍した中国のハーバード・燕京研究所の教授を辞して、81歳の鳥居龍蔵が帰国した。「鳥居博士、中国から帰国！」の記事は、当時の中国の政治状況とも相俟ってセンセーショナルに報道され、国民が鳥居龍蔵の名を思い出す契機となったが、一月を待たず報道は沈静化し、以後しばらくの間、鳥居の名は新聞紙上から消える。

再度鳥居の名が新聞紙上に登場したのは、「貧困の鳥居博士」に関する記事であった。経済的基盤を持たないまま帰国した鳥居家族の窮状を察知しての記事であった。以後断続的に「鳥居博士の窮状に対策を」、「貧困の鳥居博士を救え」といった趣旨の記事が散見されるようになる。報道初期の記事の大半は、かつて本山が社長を務めた大阪毎日新聞に掲載されたものである。文化人や文化活動を支援する元社長の姿勢が社風として残ったのであろうか。時を経ず、他の新聞各社もこの状況を確認し、鳥居博士の救済は世論化していく。このような状況を背景に、時の首相吉田茂から空き家であった建設大臣官邸の無償での貸与が提案され、鳥居は晩年の生活と研究の拠点を得ることとなった。鳥居と本山の交流の歴史は、本山の死後も、なお鳥居を支える効力を発揮したのである。その年の5月、新居に入る鳥居家族の報道紙面を彩ったのは、「ツツジ咲く鳥居博士の新宅」の大見出しと、満面の笑みを浮かべる鳥居夫妻の姿であった。

おわりに

ここまで、鳥居龍蔵と本山彦一との交流の軌跡を、主に当館所蔵の資料をもとに時系列に辿ってきたわけであるが、稿を閉じるにあたり、冒頭に設定した課題に立ち戻りたい。

鳥居龍蔵は、優れて独自の道を歩んだ研究者である。小学校中退、少年期のフィールドワーク、東京大学辞職と家族を調査員とする「鳥居人類学研究所」での活動など、その事例は枚挙にいとまがない。一方、本山彦一は、関西財界の重鎮でありながら考古学に傾倒し、ライフワークの結晶として本山考古室を残した、当代一流の文化人でもあった。異なった道を歩む二人が、考古学を接点に終生稀有な連携を保ったのである。

「産・官・学」連携による共同研究といったフレーズをよく耳にするが、実際の運営には多くの困難を伴うことが多い。このような中で、鳥居と本山の関係は、戦前における学界・財界の理想的な協力関係のモデルケースの一つであった。「鳥居は本山に対して、何を謝したのか?」。その答えは、終生継続した異なる業界間での「協働」であったのかもしれない。

註

(1) 国府遺跡における弥生土器と縄文土器の共伴出土については、鳥居龍蔵「畿内の石器時代に就いて」(『人類学雑誌』第32巻9号)に、以下の記載がある。

国府の遺跡は中々地域が広く、遺跡群が此処彼処に存在しております。是等の遺跡も大体からいえば固有日本人のものでありますが、ただ字「乾」付近の崖側の場所には弥生式土器に相混じてアイヌ式土器があります。

引用文中の字「乾」からは人骨も出土しており、これを記録したのが、本文中に第14図として掲示した土層断面図である。

主要参考文献

- 荒木利一郎 1929 『稿本 本山彦一翁伝』 大阪毎日新聞社
- 石尾和仁 2014 「本山彦一と鳥居龍蔵の交流」『アワーミュージアム』 No55 徳島県立博物館友の会
- 関西大学博物館 2010 『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』 関西大学博物館
- 関西大学博物館 2011 『関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来』 関西大学博物館
- 関西大学博物館 2013 『阡陵』 No66 関西大学博物館
- 関西大学博物館 2016 『関西大学蔵 本山コレクションの精華』 関西大学博物館
- 国立民族学博物館 1993 『民族学の先駆者 鳥居龍蔵のみたアジア』 国立民族学博物館
- 故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松蔭本山彦一翁』 大阪毎日新聞社
- 東京人類学会 1917 『人類核雑誌』 第32巻第9号 東京人類学会
- 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2018 『鳥居龍蔵 日本人の起源に迫る』 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
- 徳島県立博物館 1993 『徳島の生んだ先覚者 鳥居龍蔵のみたアジア』 徳島県立博物館
- 鳥居龍蔵 1918 『有史以前乃日本』 磯部甲陽堂
- 鳥居龍蔵 1925 『有史以前の跡を尋ねて』 雄山閣（後に全集3に所収）
- 鳥居龍蔵 1953 『ある老学徒の手記』 朝日新聞社
- 兵藤義高 1970 「鳥居博士と大洲」『鳥居龍蔵博士の思い出』 徳島県立鳥居記念博物館